
カガミ

村田やく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カガミ

【コード】

N8511G

【作者名】

村田やく

【あらすじ】

街での連続殺人。その犯人の話。

家に帰ってきた私は、手にしたものを冷蔵庫に入れ、リビングにある少し古びたソファに座り、テレビのリモコンを探したが、手の届くところにリモコンは見つからず、視界の中にもないのでイライラとしたが、テレビの上に置いたことに気づき、それを取りに行くついでに、テレビの電源をつけ、再びソファに沈み込んだ。

番組を国営放送に合わせる。そこでは、昨日あった事件について、綺麗な女性が、くそまじめな顔をして報道をしていた。

番組を、T Sに変えてみる。そこでも昨日あった同じ事件について報道していたが、こちらでは、年をとった白髪の男が、えらそうな表情とえらそうなしゃべり方で、よくわからない持論をかざし、これまたえらそうに、事件の犯人を非難していた。

昨日の事件 殺人事件である。被害者の女性は、腹を裂かれ、内臓の一部がなくなっていた、と報道されている。内臓の一部とは、要するに子宮のことである。

テレビでは具体的な臓器は報道されていない。生々しすぎるからだろうか。

私はチャンネルを国営放送に戻し、ソファから立ち上がった。

この事件については、よく知っている。今さらこのような、凄惨な事件を面白おかしく報道するだけの番組を見る必要など、これっぽっちもないのである。しかしきつと、明日の朝には、今日あった事件についての報道が始まっているのだろう。

冷蔵庫をあけ、先ほど入れた物を取り出した。一見グロテスクな代物だが、その実、私たちが産まれるまでを過ごした、故郷のような物である。生命を育む機関なのである。

私はそれを冷蔵庫へと戻した。その横には、同じ物が既に三つ、並んでいる。今回の物は、四つ目なのである。最初に入れた物だけ、ホルマリンに漬けてある。

先ほどテレビに出ていた白髪の男性は、昨日の事件を「連続殺人」だといっていた。彼にしては立派な推理　といたいところだが、そもそも内臓が抜き取られる事件が続けば、なにかしら関連性があると見るのが普通である。

犯人が被害者の女性から子宮を抜き取るのには、別に大した理由があるわけではない。ただ単に、自分が殺した人数の記録、記念であり、子宮を選んだのは、ある殺人鬼の真似をしただけなのである。それなのに、メディアは勝手な憶測をとばし、滑稽なことこの上ない。なにかしら深い意味を見つけ出そうとする彼らには、その間抜けな憶測を見るたび、失笑を禁じえない犯人の私である。

私は綺麗な女性を選んで殺している。その理由は、美しい者が、なにも語らぬただの物になることによって、更に美しさを増すように思え、そのことに性的な興奮にも似た感覚を覚える為である。綺麗な男性という物も、この世には存在するのだから、返り討ちにあつては元も子もない為、女性しか襲っていない。いや、そもそも最初に殺したのが、麗しい女性だったのだ。ひよっとしたら、それが女性しか殺さない理由なのかもしれない。正直なところ、自分でもそこはもう、よくわからないのだ。

いつの間にか、事件についての報道は終わり、「カルガモの赤ちやんが生まれました」などという、どうでもいいニュースが流れていた。

私はテレビを消し、リビングを出て、寝室に入り、ベッドに横になった。そして目をつぶり、少し前のことを思い出していた。

彼女は、私のことを信頼していた。

いつも、どんなときでも、私の後ろをアヒルの子供のようについてきて、その小さな、まるで庭桜のように可愛らしい顔を、くしゃりと崩して、時には笑い、時には泣きながら、私の手をぎゅっと握っていた。

彼女と初めて会ったのは、中学一年の時だった。

ある日のこと、気の弱い彼女を、その時はどこが気に入らなかったのかわからなかったが、数人のクラスの女子がいじめていた。子供なのだから当然かもしれないが、本当に幼稚ないじめで、私は我慢がならず、見つけた瞬間止めに入った。

「大丈夫かい？」

と訊いた私を、彼女は信じられないものを見た、といった風に呆然と見つめ、涙をふくのも忘れてるように見えた。

「あ、ありが、とう」

戸惑うように、そう答えた。

これは後から聞いた話なのだが、彼女は当時、父親が警察に捕まったとのことで、誰もが彼女を嫌悪し、クラスでもいつも一人だったらしい。父親がどんな罪を犯したのかは知らないが、その報い子どもがつける必要は、全くないのである。しかし、人間とは厄介なもので、そうとはわかってはいても、罪人の子供と仲良くするのは難しく、本来いじめを止める役割を担っているはずの教師も、それを黙認していた節がある。

私は、そのような事情は知らなかったが、とにかく彼女がいじめられているのはわかった為、このままでは駄目だと思い、彼女を護ろうと決意した。

それから後、私は彼女と、なにかにつけて行動を共にするようになった。彼女のクラスを訪ね、呼び出し、立ち入り禁止の屋上で、一緒に食事をするようにもなった。そのうち、一人暮らしのうえ、朝に弱く、毎日昼食は購買のパンだった私のために、彼女が弁当を作ってきてくれるようになった。彼女の弁当は素朴で、華やかさとは無縁だったが、とても美味しく、私はそのうち、昼休みがとても楽しみになっていた。

しかし、いじめという物は、感染でもするのだろうか。いじめられていた彼女と仲良くしていた私の周りからは、だんだんと人が減り、いつの間にか、周りには私と彼女の二人だけしかいなくなっていた。

「う、ごめんね、わたしのせいで。あんなに、人気者だったのに。」

そう絞り出すようにいって、彼女はうつむき、整った眉を悲しそうに歪めた。

「気にすることはないよ。確かに友達のをほとんどを失くしたかもしれないけれど、全員じゃあない。まだ一人、ここに残っているからね。君は、裏切ったりしないだろう？」

そういって彼女の柔らかい髪の手櫛で梳くと、彼女はぽつと頬を赤らめ、

「うん。ありがとう」

と、照れくさそうに微笑んだ。

いじめられていた理由を私に話してくれたのは、この時だった。

自分が嫌われていた理由を話してくれるのは、本当に私が信頼されている証拠のように思え、胸がいっぱいになったものである。

私たちは成長し、同じ高校に入ったが、依然として二人きりのままだった。

しかし、私は寂しいとは感じず、むしろ幸せだった。私のそばには常に彼女がおり、彼女は私を慕い、私も同い年の彼女を、まるで妹のように可愛がっていた。いや、妹のように、とは少し違つかもしれない。ひよっとすると、あれは恋だったのだ。しかし私は、それまでそのような気持ちを経験したことがなかった為、彼女への気持ちこそうだとは気づかず、持て余していた。

この世界には、彼女と私だけだった。彼女と私を馬鹿にし、軽蔑する、邪魔な人間は沢山いたかもしれないが、私の視界には、彼女しか入っていないかった。それならば、この狭くも心地よい世界には、私と彼女の二人だけなのである。誰も侵すことのできない、聖域なのである。その聖域の前では、私の、恋だと気づけなかった恋心など、ちつばけな物で、どうでもいいことのように感じられた。

しかしある日、私の家で一緒に料理をしているときに、彼女の口から、信じられない告白がされた。

「恋人ができたの」
「聖域を侵されたのである。」

たった二人の清らかな世界に、不純物が紛れ込んだ。しかも、それを紛れ込ませたのは、他でもない、彼女なのである。手ひどい裏切りだった。

彼女は、頬を染めながら、続ける。

「いままでごめんね、これで、あなたに迷惑をかけることも
私の手には、包丁があった。」

気がついた時には、彼女は床に倒れ、白い喉から血を流し、既に動かなくなっていた。

雪の上に咲く、赤い花。

その色彩のコントラストが、私の網膜を刺激し、私は奇妙な興奮を覚え、身体を小さく震わせた。

美しい。

快樂殺人者というものは、人の命を奪うたびに、このような気持ちを味わっているのだろうか、と思った。そのとき、ふと、ある殺人鬼の名前が頭に浮かんだ。

ジャック・ザ・リッパー。

私は、彼女の腹部に視線を向けた。

新しい生命をその身に宿し、育み、産み落とすための、女性特有の器官であり、ジャックが、殺した娼婦から持ち去ったといわれる物。ある意味最も美しい部分、それが隠された場所。

私は、包丁を持ち直した。

いつの間にか寝てしまっていたようだ。

ベッドから起き上がった私は、着替えもせずに寝てしまったことに気づき、少し不機嫌になりながら、うん、と伸びをした。窓からは、既に朝の陽ざしが差し込んでいる。

私はシャワーを浴び、外出着に着替え、ナイフを鞆の中に入れて、がらんとした家を出た。

街を歩き、美しい女性を探したが、先ほどまで、最初に殺した彼女を夢で思い出していた為、すれ違うどの女性も、全く美しいとは思えなかった。それほどまでに、彼女は美しかったのである。

街は、陰鬱な空気に包まれている。

殺人事件が立て続けに起こり、その犯人は、まだ野放し状態である。警察は何をしているのか、といったような会話が、そこかしこでされているだろう。

私はその空気を背に、服飾店に入った。

そこには、色とりどりの服が並び、男性も女性も、それを身体に当て、つれに「似合う？」などといって、そのつれも、「とつても似合うよ」などと、心にもない世辞をいつている。外の暗い雰囲気など、ここではあまり関係ないらしい。

私はぐるり、と店内を見回し、美しい女性を探した。

ふと、目にとまった少女がいた。

目の前の壁は、ぴかぴかに磨かれており、店内の景色が、左右反転して映されている。

その壁の中に、少女は立っている。

整った顔立ちをしている。

艶やかな長い黒髪が、背中に向かって流れ、すらりとした肢体を、シンプルな洋服が、清楚に彩っている。

顔色は、雪のような白、というよりは、青白いといった感じで、少々不健康そうな印象を受けるが、その程度では、その少女の美貌は、微塵も損なわれない。

「綺麗だね」

その少女に向かって、手を伸ばす。すると、少女も私に向かって手を伸ばし、私の手と重なった。冷たく、硬い感触。

「一緒に来ない？」

微笑みかける。しかし、壁の中の少女も同じように微笑むだけで、返事をしない。

その少女は、壁の中から出ることはできないのだ。少女がいる壁

を壊したところで、少女はいなくなるだけであり、壁の中から出てくることはないのである。いや、そもそもその少女は、そこにはいないのである。しかし私は、少女に触れる方法を知っている。

私は鞆の中からナイフを取り出し、その少女に突き立てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8511g/>

カガミ

2010年10月8日15時31分発行